

〔解題〕

アンドレイ・ニコラーイェヴィッチ・サハロフ

「ロシア国家と歴史の法則——我が国は常に中世的伝統が強かった——」

（『独立新聞』1996年6月11日）（1）

宮崎英隆*

はじめに

*『広辞苑』によると、「解題」とは「書物や作品の著作者、著作の由来・内容、出版の年月などについての解説」とある。本稿では、まずA. N. サハロフ自身と『独立新聞』、そして掲載された年月の意味を指摘した後、当論文内容に関して5つの節ごとに翻訳し、必要に応じて訳注をつけることにより全体の趣旨と意義を解説していく。

〔著者・掲載紙・掲載年・論旨の解説〕

アンドレイ・ニコラーイェヴィッチ・サハロフは、論文投稿当時の1996年6月時点でロシア科学アカデミー・ロシア史研究所所長、同アカデミー準会員・教授である。因みに核物理学者で「水爆の父」と呼ばれたアンドレイ・ドミートリイェヴィッチ・サハロフ（1921-1989）とは別人である。

今回取り上げたサハロフ論文が掲載された『独立新聞』（“Nyezavisimaya Gazeta”）は、1990年12月21日に創刊され1991年以降全国的に発売された、「権力」から「独立」した主張を展開し知識人に強く支持された新聞である。1990年と言えば、ミハイル・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長のイニシアチブで始まったペレストロイカとともに、チェルノブイリ原発事故を契機に本格的に奨励されるようになったグラスノスチ（「声を出すこと」、すなわち「自由に論じること」、一般には「情報公開」と訳される）の下でリベラルな主張の表明が相当程度可能となっていた時代である。また同年6月12日に成立した「新聞雑誌その他のマスメディア法」が8月1日に施行され、それまでのグラヴリットによる検閲が禁止されるという状況の好転が『独立新聞』や『論拠と事実』（“Argmenty i Fakty”）などの反権力志向のマスコミを誕生させたと言える。

こうした背景の下で創刊された『独立新聞』は、1993年10月に発生した「10月事件」、すな

提出日2011年8月24日 受理日2011年11月23日
*教養学部国際学科教授

わちソ連崩壊後に発生した大統領府と議会（最高会議と人民代議員大会）との間での憲法制定と議会改革をめぐる深刻な政治対立が頂点に達し、ボリス・N・エリツィン・ロシア共和国大統領側がルスラン・I・ハズブラトフ最高会議議長やアレクサンドル・V・ルツコイ連邦副大統領らが立て籠もる最高会議ビル（いわゆるホワイト・ハウス）に向かって戦車で砲撃するという事件では、西欧型の民主主義を目指すとする大統領が非民主的な手段を取ったこと、政権側がこの事件の報道に検閲を実施したことに対し、その検閲された部分を白抜きにして発行することで抗議の姿勢をアピールしたとされる。

次に、1996年とはどういう年であったのかである。この年はロシア連邦下で初めての大統領選挙が行われた年である。この時、90年代前半に顕著になってきた政商・オリガルヒによる国有資産の不正蓄財によって略奪経済化（prikhvatizatsiya）し公平な民営化（privatizatsiya）が阻害されて国民生活が一層悪化するという事態を前に、社会主義体制が良かったというソ連時代への郷愁と民心のエリツィン離れが起きていた。こうした状況下で再選を果たすためにエリツィンはボリス・A・ベレゾフスキーの支援を要請し、これに応じてベレゾフスキーは多額の資金を投じ、傘下のロシア公共テレビ（ORT）などを通じてエリツィン再選を強力に支えた。投票日は同年6月16日であったが、それにも拘わらず得票数1位と2位を争ったエリツィン大統領とゲンナージー・A・ジュガーノフ・ロシア連邦共産党党首との間で決着が付かず、7月3日の決選投票でエリツィンが55%台の得票率を得て薄氷を踏む思いで再選されたのであった。そしてエリツィンがこの論功行賞としてベレゾフスキーを安全保障会議書記に抜擢したことによりオリガルヒの国政への関与が深まり、その結果としてエリツィン改革は失速する。1996年は重大な転換期にあったのである。

さて、サハロフ論文の論旨である。1992年の新生ロシア誕生直後から学者、研究者、マスコミなどのインテリ層ではロシアのアイデンティティーを改めて問う議論が盛んに行われていた（拙稿「新生ロシアの政治危機とアイデンティティーをめぐる論争」『文明』No.9 2006などを参照）が、それはあたかも19世紀中頃の「西欧主義」と「スラブ主義」の論争を髣髴させるものであった¹⁾。そこに20世紀初頭に生まれた「ユーラシア主義」の主張が加わって百花繚乱の議論が展開された。一方、この時のエリツィン政権の内政・外交は早くも1993年を境に西欧志向の改革への熱意が徐々に消え、守旧的になっていった。こうした状況を踏まえて書かれたサハロフ論文が、ロシアはずっと中世的な社会・国家であったこと、真の近代的民主国家を打ち立てるためにはまさにこの長期にわたる中世的伝統を克服しなければならないことを論じたと言う意味で、同様の趣旨を主張する他の多くの諸論文を集約したものとして位置づけることが出来る。したがって、この論文を紹介することには十分な資料的価値があると考えられる。

民主化への期待が大きかったこの時期には、「スラブ派」的論理を展開する者よりも「西欧派」的論理を主張する者が圧倒的に多かったので、こうした論文を掲載する紙誌には必然的にリベラルなそれが多かった。

以上をまとめると、本稿で解題するサハロフ論文の意義は、（1）権力に批判的な『独立新聞』に掲載されたこと、（2）掲載のタイミングがエリツィン大統領再選を目指す選挙の直前だったこと、（3）論旨としてロシアの後進性克服の必要性を強調したこと、の3点にある。

以下では、ロシアの本質に迫る一つのルートとして、その議論の詳細を、節ごとの翻訳と訳注による解説によってトレースしてみたい。

- 1) その主なものに、S. チュグロフ「東と西の狭間のロシア？」(『世界経済と国際関係』1992. 7), B. A. シュメリョフ「ロシア対外政策形成の諸問題」(『ロシアと現代思潮』1993. 1), N. コソラーポフ「ロシアの対外政策: その策定の諸問題と政治関係形成のファクター」(『世界経済と国際関係』1993. 2), 「1993年のロシアの対外政策 政治家と専門家の分析」(『ボリス』1993. 4), N. コソラーポフ「ロシア: 社会の自己認識と対外政策」(『世界経済と国際関係』1993. 5), N. ポポフ「ロシアの対外政策 (政治家と専門家の分析)」(『世界経済と国際関係』1994. 3), Yu. オレシュック「我々と西欧」(『世界経済と国際関係』1994. 8-9), N. コソラーポフ「ロシア: 歴史的選択の核心は一体どこにあるのか?」(『世界経済と国際関係』1994. 10, 11) などがある。

[翻訳]

第一節 ヨーロッパ世界の片隅で

今日、多くの人々—ロシアにおいても、外国においても—は、ロシアでは一体何が起き、何が進行中で、これから何が起きるのだろうか、という問題に心穏やかではいられない。しかも、こうした問題に関心を持つ人の大多数は、ロシアでは何か異常な出来事が、何か特別な、本当に破滅的な出来事が起きたと確信している。そこで彼らは、この国をこういう状態にした本当の敵は誰なのかを探し続けている。大いに矛盾し、常軌を逸した、冒険的とさえ言える救済の処方箋があれこれ提案されている。重苦しい予言にも満ち溢れている。そうした中でもロシアは、歴史的視点から見て、経済、社会関係、民族的文化、また国民のメンタリティーや伝統、その国民の深奥から出現した指導者層といった、まさに自己の歴史によって形成された現実を生きている。この現実、19世紀後半から(20世紀全体に亘っても)わが国が当然かつ不可避的に近代化の時代へ、社会生活の中世的形態の現代文明的形態への移行の時代に入ったという事実を示している。

ロシアは他の先進国の文明化された発展の段階に大きく遅れをとっており、まさに今、それを経験しつつあるのである。しかも経済的、社会的、民族的、文化的、その他のあらゆる側面において。

1861年における農奴制廃止以来わずか135年しか経っていない。歴史における100年強とは何か、ましてやソヴィエト国家が存続した期間である75年から80年とは? ²⁾ これは3ないし4世代に当たる。イギリスでは、ブルジョア思想を背景に遂行されたイギリス革命³⁾ から100年経って初めて、この革命が信奉する思想に沿った経済的基盤を形成する産業革命が始まったのである。

フランスでは、フランス大革命後100年強経ってからやっと、ある程度明確な輪郭、ブルジョアの諸関係、そして民主主義体制の基礎が築かれた。そして20世紀に入って初めて、英国でも、フランスでも、アメリカ合衆国でも、ドイツでも、第一次世界大戦と第二次世界大戦という劇的な出来事と破滅的な危機やきわめて激しい社会的武力衝突の後に、ブルジョア民主主義

の諸要素，すなわち明らかに未熟であるにもかかわらず世界全体にとって今日きわめて魅力的なものとなっている市民社会，法治国家，個人の自由，社会的保護が最終的に形成されたのである。

このことを最も明白に示している事例は特に現在の移住の流れである。すなわち，ラテンアメリカ，アジア，アフリカ，東欧，旧ソ連諸国の住民が先進欧米諸国へ嵐のごとく移住しているという事実である。逆の現象は見られない。

欧米諸国がこうした相対的に恵まれた状況に達したのは苦しく困難な道を経験した後であった。すなわち，あのまさに農奴制，絶対主義，諸革命，民族間の戦いを含む流血の戦争，個人や異分子への容赦の無い弾圧，拷問などを通してである。そして，今でもかつての大火のような大問題が西側諸国の心を悩まして（カナダのケベック州の対立，アイルランド問題，アメリカにおける黒人の運命など）とは言え，今日これらすべては過去のものとなった。

ロシアは一連の歴史的理（地理的かつ気候的条件，幻想的とも言える広大な空間，信じられないような多民族性，数え切れない外部からの侵入，世界文明の最も進んだ源泉からと海への恵まれた出口からの遠さと隔絶，こうした諸条件下における国家の圧倒的な役割，個人の役割が事実上ゼロであること）の結果，ヨーロッパ世界の端に位置することになった。同時に，唯一のユーラシア大陸の大国として，ロシアはダイナミックなヨーロッパのみならず発展に遅れたアジアの歴史的経験を自らの特徴として取り込んだのである。ロシアで近代化が始まったのはやっと19世紀後半になってからであり，すなわち先進欧米諸国よりも数世紀遅れてである。このことを認めることが憂鬱であろうとなかろうと，自明の理なのである。そして近代化の道を歩みながらも，ロシアはその固有の歴史的経験や領内に住む国民の気質に合わせて独自の道を歩んでいった。ロシア—それは全体的に言えば，古代ローマ，ヴィザンティン，インド，中国のような一種独特の文明であるということの当然のことながら認めるべきであると私は思う。

ところで，伝統的な考え方では，近代化の主な特徴は先進的生産技術の開発，社会関係の向上，社会的政治的文化や日常生活上の文化を含む文化全体の発展である。これらはすべて正しい。しかし，中世的規範の下に成り立っていた生活の改善を目指す中で西側世界（そして東側世界でも）で発展してきたそのようなプロセスの核心的要素となったのは，個人の社会的自己確立という低い次元（国家規模ではない，という意味で）における社会の段階的な民主化と，「社会のピログ」⁴⁾の広範な国民大衆への分配であった，と思われる。歴史的プロセスの根底には常に個人レベルの人間の利害があった。欧米ではこの利害への関心が革命などの大転換の後に社会の近代化をもたらしたのである。

今日の欧米世界では個人の自己確立は既に達成されており，この「社会のピログ」は，良かれ悪しかれ，既に分配されている。そして「分配」の規範も確立されている。さらに個人と社会の利害はある程度までバランスが取れていると言える。

2) 75 年は 1922 年の最初のソ連邦発足から，80 年は 1917 年のロシア革命からの年数である。

3) この「イギリス革命」とは 1642 年から 1649 年にかけての「イギリス内乱」すなわち「清教徒革命」を指している。チャールズ I 世の王党軍に対して「議会軍」がクロムウェル率いる「鉄騎軍」

の軍勢とともに戦って勝利した事件である。

- 4)「ピログ」とは肉や野菜を入れたロシア風パイで、一般にはピロシキとして知られ、ロシア人が日常的に好んで食べる。したがって、辞書的には「(私腹を肥やすための)公共財産」という意味を持つが、ここの文脈で言う「社会のピログ」とは「必要不可欠なもの」というニュアンスで解釈できる。

第二節 ロシアの国民とその自己確立の形態

自己確立と社会的富の自分への分け前とに対するこのまさに人間的利害は、ロシアにおいては19世紀から20世紀にかけて一気に溢れ出した。個人の利害が他の民衆や階層、階級と矛盾するようになって、社会的激動や衝突、流血の惨事の後に溢れ出したのである。「大改革」⁵⁾もロシアにおける20世紀の革命も、また流血の国内戦と革命的全体主義社会の確立も確実に国民をこのような絶え間ない動乱に引きずり込んでいった。20世紀ロシアにおけるあらゆる社会的「芝居」は何よりも国民が主役であったし、今もそうあり続けている。これらの「芝居」は近代化の初期において国民的特質の悲劇的痕跡を示したものと言える。わが国の歴史は、この歴史の主役である国民の、成長の特性とその水準、メンタリティー、伝統、歴史的体験という特徴を形成してきている。この意味で、十月革命後にロシアで確立された体制、特にスターリンが権力の座に着いた20年代後半からのそれは、文字通り国民の体制であった。なぜなら、スターリンはまさにこの国民に対して、スターリンには身近で当たり前であった自己確立の形態と民主化、「ピログ」の分配の可能性を与えたからである。国民は国家の農業集団化と工業化に積極的に参加し、スターリンの「粛清」を嬉々として支え、「人民の敵」と戦い、「世界資本」を忌み嫌い、自分よりも上の地位にいたすべての人物に疑いの目をもって接した。集団主義、共同体的結束⁶⁾、革命的排他性、貧富の差のない社会的な平等は、凄まじい精神的複雑さと革命や新しい社会の華麗さや修辭に目覚めさせられた信じ難いほどの自尊心を持つ、未熟で半ば文盲かつ教養の足りない個人にとっては力強い支えであった。ロシアではまさに革命で勝利した国民に固有の性向に合致した形態の下に民主化と個人の自己確立が行われた。そしてこれは、気に入られようと入れまいと、地球で起きた偉大な出来事であったのである。すなわち、全体主義体制のあらゆる残忍行為にもかかわらず、この状況を全体主義体制の在り方として容認してきたのは他ならぬ社会の下層の何百万という大衆である。その上、このまさに勝利した国民の一部を構成する党も官僚も、エリートもリーダーも同様である。そして今日まで、革命以来多くのことが変転したとは言え、われわれすべては十月革命の子であり、精神的歴史的な影響を受けた子なのである。もちろん、当然のように現実は一とところに留まってははいない。社会は常に変化している。わが祖国の歴史は過渡的段階が依然として続いている。それは、世界の歴史や社会の現実で確たる地位を自ら獲得した個人がまず第一に重要であると見なされる現代の文明の規準に一層「近づいて」きているということを意味している。「ペレストロイカ」、行政権力と立法権力との武力衝突⁷⁾、過ぎ去ったソヴィエト時代へのノスタルジーを通して、既に拒絶されたはずの価値の一部の確かな復活を通して、また盲従的な精神構造からの解放を通して、近づいているのである。

5) アレクサンドルⅡ世（在位 1855-81 年）の下に 1860 年代に遂行された内政の諸改革。ドミートリー・A. メドヴェージェフ大統領は自己の改革のモデルとしてこの大改革を評価している。2011 年 3 月 3 日にサンクト・ペテルブルグで開催された農奴解放令公布 150 周年記念会議「大改革とロシアの近代化（現代化）」で、エカテリーナ大帝（Ⅱ世：在位 1762-96 年）もアレクサンドルⅠ世（在位 1801-25 年）も、皇帝ニコライ（在位 1825-55 年）も農奴解放の必要性を考えていたにもかかわらず結局「上からの革命」を決断しなかったものを、アレクサンドルⅡ世が実行に移したことを高く評価した。そして、次のような発言をして改革への強い意欲を述べている。

「われわれは今日、わが国のいまだ未完の民主制度を発展させるべく努力を続けている。また、わが国の経済を変える努力を続け、政治システムを改めつつある。われわれは丸丸となって 1 世紀半前に道をつけたあの路線を継続している」（「ロシア連邦大統領公式ウェブ・サイト」2011 年 4 月 13 日検索）

6) ロシアでは農民は古くから血縁の共同体から地縁の共同体へ、そしてその発展形態としての農村共同体へ帰属することでその生活を支えてきた。その結束は強く、資本主義が発展し始めてからも解体されなかった。この「共同体」はロシア語で「オブシチーナ」、農村共同体は「セーリスカヤ・オブシチーナ」または「ミール」と呼ばれる。

7) 新生なったロシアがロシア連邦としてその歴史を踏み出した 1992 年が価格の自由化から始めた急進的経済改革の推進に象徴される「経済」の時代であったのに対し、翌 1993 年はその急進的経済改革が頓挫して「政治」対立が表面化した年であった。それはエリツィン大統領側と議会側（ソ連邦時代から引き続いて存続していた「最高会議」と「人民代議員大会」）との激しい対立という構図で現れた。もともと保守的であった議会側はエリツィン大統領らが進める経済改革にも新憲法制定にも反対していたが、1993 年 4 月実施された国民投票で国民の約 53% が大統領側を支持したため、それ以降国民のお墨付きを得たとして大統領側が新憲法制定と新しい議会創設を最高会議・人民代議員大会抜きに強引に進め始めた。これに対して議会側はこうした決定が憲法違反との立場を明確にし、9 月には最高会議を開いて強引にエリツィン大統領の解任を決議した。追い詰められたハズブラトフ最高会議議長ら議会側とそれを支持する連邦副大統領ルツコイらが最高会議に籠城したのに対して、エリツィン大統領側は 10 月 4 日に最高会議ビルを戦車で砲撃し、最終的に武力によって彼らを降伏させたのである。この政治対立の結末は、民主主義体制の確立を標榜していたエリツィン大統領がその政敵を追いつつ落とすために非民主的な手段を行使することになったが、この事実に対して欧米を中心に賛否両論の議論が沸騰した。

第三節 世界は荒廃しているのではなく変化している

今日ロシアの多くの人々は歴史の進展そのものや「ゲームの規則」の変化を生真面目なまでに受け入れようとしている。そこで最も注目すべきことは、彼らを当惑させているのが新しい諸原則に基づいた自己確立の不可避性であるということである。その諸原則の基礎を成すものは集団や国家の強力な保護でも、彼らの個人的な非力さを覆い隠しているあの頼りがいのある平等主義でもなく、個人の能力であり、個人の努力であり、個人のやる気なのである。すなわち、このことは今日における質的变化の兆しであり、ロシアがもともと貧困や小作人的な起源を持つといったこととは無縁なことなのである。すなわち、現代の文明化された個人、時代遅れの集団主義的中世世界の境界を越える現代的に文明化された個人への方向転換は西欧化でもある。ロシア人はこのことを大方理解してきてはいるが、世界の歴史はまさにこの方向に進んでおり、われわれはソ連成立からほぼ 80 年経過した今、真実とさまざまな未知の「西欧」（これがロシアにとって甘い社会的経験であるのは自明であるが）を知って、改めてこの歴史の流

れに帰っていつているのである。これはロシアにとって明らかに国家的規模の快い社会的経験である。したがって、あらゆるものが地球という宇宙の単一の法則に従いながら人類の歴史から言って必然的な方向に発展を続けているとは言え、一方で世界は荒廃しつつあるようにも見える。もちろん普通の国民にはこのことから逃れることは容易なことではない。

歴史家は今日、今後のロシアが多くの意味でその過去の歴史に運命的に決定付けられているのだと述べることは恐らく可能であろう。ロシアの新しい社会的状況への移行が苦しみながら遅々として進んでいないからである。しかし、ロシアは激しい意見・利害の葛藤やばいこる刑事犯罪を目にしながらも市民社会の方へ向かって歩みつつある。欧米の経験とソヴィエトの伝統をうまく組み合わせた新しい社会の雛形（ステレオタイプ）の検討が進んでいる。同時に、20世紀の終わりから21世紀の始まりにかけての文明化された大釜の中で、未だに存在するロシアの中世的未開の煮詰め直しが続いている。また人々はどんどん変わっていくに違いない。金儲けで犯罪的行為を犯した指導層、賄賂に弱い官僚、製造業や金融で成功した成金達の子供や孫達は、モスクワ国立大学やソルボンヌ大学、あるいはオックスフォード大学を出て、親や祖父達のように富をごっそり盗み去るようなことはせず、既にわがロシアの発展の中核となりつつある。半ば野蛮な山岳民（コーカサスの諸民族）あるいはトナカイを飼育する遊牧民が国の主要な中心地の知的なエリート層と隣り合って住むほどに仲よくなれば、この「煮詰め」の過程でわが国の地方や国民の経済的かつ文化的水準の急激な低下が徐々に改善され最終的には消滅していくであろう。こうした均質化ができれば（それには数十年必要であろうが）、ロシアにおける市民社会の全面的な発展もまた促進されるであろう。その結果、イデオロギーに縛られることなく政党や大統領が選ばれ、政権が構成されることになろう。そして、彼らはあらゆる方策・政策を通して歴史の「社会的要請」を完遂させる仕事に取り掛かるであろう。

それと同時に、わが国の歴史においては、ロシアが東洋と西洋の間に横たわる広大な空間で数千年に亘って発展してきた結果としての国家的輪郭・外形が克服し難く現れるであろう。東洋と西洋の間のロシアが目指すべき道と場所、社会としての方向付けの選択という問題は、11世紀にも、16世紀にも、19世紀にも、20世紀にも存在していた。地政学の法則—ロシアの遠方と近隣の諸国がロシアの周辺で敵対的環で取り囲んで圧力をかけようとする向こう見ずの意図とともに、それに対してルーシ、モスクワ公国、ロシア⁸⁾がこの環を断ち切り、バルト海と黒海への出口を求めて諸隣国を屈服させようとする向こう見ずの意図とともに—は、これらの世紀には繰り返し現出した。ロシアの「動乱」⁹⁾は、その後に専制体制という道で（ああ憂うべきだが）国家を復興させつつも、何世紀にもわたって何回も繰り返されてきた。14世紀から17世紀にかけての苦難の祖国防衛的なものから18世紀から20世紀にかけての侵略的で攻撃的なものに移行したロシアのナショナリズムの特殊性は、ロシア史の不変の特徴である。そして、わが国の歴史の時代を超えた「真実」は、次々に新しい中味で満たされ、全く異なる社会的な色彩で彩られ、全く別の社会的理想を掲げて前進しつつ、それぞれの段階で新しいリーダーと預言者によって指導されてきた。この「時代を超えた」真実と「現在の」真実が組み合わさった中でわが国の歴史の意義が成り立っていたし、将来の意義もこうした中で成り立つであろうと思われるのである。

どのような状況がロシアの進化・発展に影響を与え得るであろうか？ もちろん、市民社会への道に沿ったわが国の全面的進化は、文明化された諸ファクター、すなわちテクノロジー的、経済的、社会的、精神的な影響力の総体によって決定付けられるであろう。この総体がわが国を世界文明の切り離し難い一部にし（ただし、この際には国家的特色を失わずに）、たとえ停滞や不可避的な変動があったとしても、それは今後ますますロシアの本質に変化していくであろう。わが国の対外政策について言えば、いかなる政治勢力がロシアを率いる立場になったとしても、それは以前と同じく地政学的ファクターによって規定されると思われる。きわめて明確なことは、世界の海洋への有利な出口を失い、現独立国家共同体諸国で犠牲になった2500万人の同胞とともに自国の歴史的な国土を失うことで、ロシアがピョートル時代以前に、すなわち17世紀の終わりの時代にまで回帰することは歴史的ナンセンスであり、それを一時的な状況だとロシア人はみんな考えるであろうということである。地政学的ファクターはロシアの歴史に新しいエネルギーを吹き込むであろうし、ダイナミックスや活気、夢を与えるであろう。これらの諸問題はどのようにして解決されるであろうか？ それは、世界場裏での勢力のバランス、ロシア自身とその隣国の諸状況、それら諸国の相互関係などの総体的条件に依存している。しかし、毎年この地政学的ファクターの効力がだんだん失われていくであろうことは明らかである。この予見として言えるのは、ロシアやその隣国が自らの新しい一歩を、流血の惨事をはらんだ新しい民族のかつ地政学的押し付けとよりも、発展途上にある市民社会や人間の諸権利とを結びつけて踏み出さなければならなくなるであろうということである。21世紀が、指導層の思考や許し難い野望がこれらの諸問題の解決ではなく「戦争への道」へと向かわせるかもしれないが、何か新しい、願うに文明化された基本的考え方で、ロシア史におけるこうした「永遠の」諸問題を解決する世紀となることを期待したい。

一方で、ロシアが市民社会へ向けて前進する際には、自国の特質を孕む民族的ファクターも、宗教的人口動態学的ファクターもこれまで通り機能するであろう。

これらの諸ファクターを実行に移す力となるのは「国民の利害の表明者」ではなく、伝統主義と上層部への信頼感はあるものの、社会的組織と選挙に自分が直接参加することによって真の自由という条件の下で始まった市民社会の時代に対応しようとする国民自身であるように思われる。しかし、あの全体主義の時代に染み付いたきわめて特殊なロシア人のメンタリティーは、チェチェン戦争への人々の接し方¹⁰⁾ が示したように、この国の歴史に直接的かつ積極的に影響を与え得ると思われる。そして、この可能性は年々大きくなっていくであろうと思われる。

8) 「ロシア」の名称が文献に初めて見られたのが15世紀と言われる。1547年にイワンⅣ世(雷帝)が国家元首の称号として「ツァーリ」を正式に採用して国名が「ロシースコエ・ツァールストヴォ」になったが、国家の正式名称として「ロシア」が採用されるのは18世紀初めのピョートルⅠ世以降である。15世紀までは「ルーシ」と呼ばれ、9世紀に現在のウクライナのキエフを中心に形成された東スラブ民族の最初の国家が「キエフ・ルーシ」と呼称された。

9) この「動乱」という用語がロシア史で使われるのは、17世紀初頭に起きた「リューリック朝」から「ロマノフ朝」(1613-1917)への移行の際の政治的混乱期である。ロシア語では「スムートノエ・

ヴレーミャ」(動乱時代)と言う。1598年のフョードル帝死後の混乱の中、1603年(ボリス・ゴドゥーノフ政権下)にイワンIV世の皇子ドミートリーと称する青年(偽ドミートリー)が現れ、1604年にポーランド軍を率いてロシアに侵入することで「スムータ」が始まった。最終的にはミーニンとポジャルスキーが国民軍を組織してモスクワからポーランド軍を撃退し「スムータ」は終わる。ロシアには20世紀に入ってから、ロシア革命、内戦、ソ連の崩壊、ロシア連邦の混乱など、スムータに似た政治的混乱は数知れない。

- 10) エリツィン大統領時代に行われた1994年から1996年までの第一次チェチェン戦争と、プーチン首相の主導で開始された1999年から2002年の第二次チェチェン戦争、その後のチェチェン武装勢力によるテロ行為に対して、ロシア国民の圧倒的多数は、統一国家としてのロシアの秩序を乱す異民族への憎悪にも近い感情をもって政権の対応を支持した。

(続く)